

生命の星・地球博物館の30年を振り返る

さとう たけひろ
佐藤 武宏(学芸部長)



図1. 神奈川県立生命の星・地球博物館。時空を超えた遙かな旅へ人々を案内する乗り物をイメージして設計された。

1995(平成7)年に開館した生命の星・地球博物館(図1; 以下、当館)は、まもなく開館30周年を迎えます。

当館の歴史

当館は、1967(昭和42)年に横浜市中区の馬車道地区に開館した神奈川県立博物館(図2)をその前身としています。この時期は1968年が明治100周年に当たるため「明治100年記念事業」の一環として日本各地にたくさんの博物館が開館したとされています。開館後の1970年代、1980年代は、日本が経済的に大きく発展した時期であり、科学が飛躍的に進歩した時期にも相当します。これらのことが後押しとなり、1986年に神奈川県は、それまでの総合博物館を人文系と自然系の2つの新しい博物館に再編整備する、という大きな計画を決定しました。県西部に県民が集まる施設がほ



図2. 神奈川県立博物館(現・神奈川県立歴史博物館)。現在の三菱UFJ銀行の前身の一つである、横浜正金銀行本店の建物が利用されている。国指定重要文化財・史跡。神奈川県立歴史博物館提供。KPM-CZ3007589。

しいという県や地元の要望もあり、自然系の博物館が箱根の入り口に位置する小田原市入生田に新しく建設されることが決定したのが1988年のことです。その後、博物館開設準備室の時期を経て、1995(平成7)年3月20日、開館記念式典が執り行われ、翌21日から一般公開が始まりました。これだけの大プロジェクトであったにも関わらず、テレビや新聞をはじめとするマスメディアの扱いは残念なことに非常にささやかなものでした。なぜなら、開館日である3月20日に東京都内の地下鉄駅構内で同時多発無差別テロ事件、いわゆる地下鉄サリン事件が発生しており、事件の全貌が明らかになっていない中、メディアの注目はこの事件に集中していたためです。

30年間の活動

開館した当時の当館は、約1万点の展示資料(図3)を含む、神奈川県立博物館から引き継いだ約20万点の資料を収蔵していました。それまでの約2倍の人数になった私たち21名の学芸員は、博物館法の趣旨に則り、積極的に資料を収集し、その資料に基づく調査研究を進め、その成果を特別展や企画展、講座や講演会などで広く外部に発信するという業務を着実に進めてきました。これらの業務を指して、いつしか私たちは『博物館の仕事、学芸員の仕事は「集める」「調べる」「伝える」です』と紹介するようになり、この3つの仕事が一直線に繋がっていること、つまり、学芸員の視点では、資料を集め、その集めた資料を調べ、調べた結果を伝えることがよい博物館であり、利用者の視点では、利用者の知りたいこと学びたいことを受け取るために、博物館はさまざまなことを調べ、それに必要な資料を幅広く集めている、という考え方が浸透してきました。このような着実な歩みを30年間にわたって続けてきた結果、資料は実物資料約80万点(図4)と画像等のデジタル資料約40万点の合計約120万点に達し、約2,700編の学術的著作を上梓し、累計で約800万人を超える入館者をお迎え

するという成果を上げることができました。この期間内に開催した特別展と企画展は約100回に上ります。

この数字は館職員の努力によってのみ成し遂げられたものではありません。例えば、資料の多くはコレクターの方々からの寄贈品に拠っていますし、その資料整理には累計活動人数約7万5千人に達するボランティアの方々の活動に支えられています。外部の方による資料の利用は、学術利用が累計で約120万点、展示や報道等での利用が約10万点を数えていますし、講座や観察会の参加者といった入館者以外の利用者も累計で約24万人に達しています。県民のみならずをはじめとする多くの博物館のサポーターが博物館を信頼し、信用してくださった、その賜物が今の当館をつくり上げてきたのです。当館の活動の結果は、概要、年報としてウェブサイトで公開していますが、これらを作成する作業をしていると、いかに博物館が多くの方々に支えられているかをひしひしと実感させられ、身の引き締まる思いがします。

苦しい時やつらい時も

一方で、当館の30年は、必ずしも順風満帆続きだっただけではありません。長く続いた景気低迷の影響を受け、県財政が縮小し続ける時期を経験してきました。当館も限られた予算で何ができるか、どのように館業務を進めていくか、その都度その都度試行錯誤しながら苦難の時期を乗り越えてきました。箱根の入り口という人の流れが活発な場所に立地しているため、観光施策の強化や箱根ジオパークの認定などによって観光客が増加し、その余得で来館者が増加するというメリットがある一方で、箱根火山の活動が活発になればその影響を受けて来館者が減少するといったデメリットも経験しました。

2011(平成23)年には東日本大震災が発生しました。幸いにも展示資料を含む収蔵資料に大きな被害はありませんでしたが、地震の影響による交通混乱や輪番停電(計画停電)の影響等



図3. 当館の生命展示室. 生命の多様性を多数の展示標本を用いて紹介している。

のため当館も臨時休館を余儀なくされました。2020(令和2)年以降は新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的としたさまざまな対策を施すこととなりました。2度にわたる臨時休館や、団体の受け入れ中止、予約制入館の実施など、いわゆる「コロナ禍」の影響に約3年間振り回されました。2021(令和3)年度には、当館は約半年間臨時休館をし、空調等改修工事を実施しました。地震、コロナ禍、臨時休館が理由で、それまで毎年遠足や修学旅行で来館してくれていた学校が行き先から当館を外すようになったり、毎週のように活動してくれていたボランティアの方がモチベーションを失い博物館を去ることになったり、外部研究者の来館をお断りせざるを得なくなったことをきっかけに関係性が薄れていったりといった、つらい別れもありました。

これからの博物館が求められるもの

このように追い風の時もあれば、向かい風の時もあった30年間でしたが、とりわけ昨年2023(令和5)年は、当館のみならず博物館業界全体にとって大きな転換期となる一年となりました。1951(昭和26)年に公布され1952(昭和27年)に施行されて以来、およそ70年間にわたって大きな改正がなかった「博物館法」が、2022(令和4)年に改正公布され、2023(令和5)年4月に施行されました。法律の改正による設置者要件の拡大、博物館登録審査基準の見直し、活動の改善向上の仕組み導入なども大きな話題となりましたが、博物館の新しい役割として、地域や他分野との連携や課題解決、人材育成などが明示されたことも話題となりました。しかし、これらの新しい役割が、「集める」「調べる」「伝える」という博物館の根幹をなす業務に取って代わったわけではありませんし、今までの業務に

費やしていたリソースやエフォートの相当な部分を新しい役割に注ぎ込め、というものでないでしょう。2024(令和6)年3月に改正博物館法に基づく登録博物館として登録を受けた当館は、法の趣旨をよく理解し、今後も自然史科学に関する資料を集め、集めた資料を調べ、その結果を広く伝え、その延長上で社会の求めに応じて新しい役割を果たしていこうと考えています。

また、昨年2023(令和5)年は、違った意味で博物館が大きな注目を浴びた年となりました。国立科学博物館が目標額1億円のクラウドファンディングを実施したところ、開始わずか9時間で目標額に達しただけでなく、最終的には約5万7千人の支援者から約9億2千万円もの資金が集まったのです。これは国立科学博物館だからこそなし得た快挙であり、全国のさまざまな博物館も同様にクラウドファンディングによって資金を集めればよからう、というのは早計です。しかし、このことをきっかけに、多くのみなさまが博物館に注目し、博物館の^{きょうじょう}弱状を理解し、博物館はどうあるべきか、博物館に何を期待するかということを考えてくださったことは大変有り難い出来事だったと感じています。

展示を取り巻く環境も、技術の進歩によって大きく変化してきています。最近ではXR(クロスリアリティ)のような画像処理技術を導入したり、解説パネルだけでは得られない追加情報をBYOD(来館者が持参するデバイス)を利用して提供するように大規模な展示リニューアルを実施した博物館も登場してきています。オンラインで展示を体験できるしくみは、インクルーシブ的にも大きな意義があると考えています。とはいえ、本物の展示物の価値とその魅力はこの先も永久に色褪せないと考えています。

30周年記念特別展を開催します

開館30周年を迎えるにあたり、2024(令和6)年7月13日(土)から11月4日(月・祝)にかけて、30周年記念特別展「生命の星・地球博物館の30年 —120万点から厳選した資料で振り返る—」と題し、これまで集めてきた資料を用いて、過去から現在にわたる当館の活動を紹介したいと考えています。この特別展は、これまでの活動を紹介するだけでなく、今後も資料に根ざした活動を地道に続けていくという当館の決意表明でもあります。これまで一度も展示していなかった資料、過去の特別展で展示し好評を博した資料、学術的に大きな成果を上げた研究を支えた資料、県立博物館から当館まで長い間にわたって使われてきている展示資料(図5)、多くの人びとの学びを支えた資料など、たくさんの資料とそれに関わる活動を紹介いたします。どうぞご期待ください。



図4. 実物資料を収蔵する収蔵庫. 免震対策を施した床に置かれたスチール製ラックに標本を配架し、収蔵効率を高めている。



図5. ハマオモトの展示資料(模型). 右上は県立博物館時代のジオラマ展示. 精巧につくられた質の高い展示資料は、半世紀を経ても色褪せない。